

寐顔

永井荷風

青空文庫

りゆうこ

竜子は六歳の時父を失ったのでその写真を見てもはつきりと

父の顔を思出すことができない。今年もう十七になる。それまで

竜子は小石川茗荷谷のこいしかわみようがだに小じんまりした土蔵付の家に母と二人

ぎり姉きょうだい妹のようにくらして来た。母の京子は娘よりも十八年

上であるが髪も濃く色も白いのみか娘よりも小柄こがらで身丈せいさえも低

い処から真実姉妹のように見ちがえられる事も度々たびたびであつた。

竜子は十七になつた今日でも母の乳を飲んでいた頃ころと同じよう

に土蔵につづいた八畳まの間に母と寝起ねおきを共にしている。琴三味線ことぎみせん

も生いけ花茶ばな茶の湯なの稽古けいこも長年母と一緒にである。芝居えんへも縁ち日へ

も必ず連立つれだつて行く。小説や雑誌も同じものを読む。学課の復習

試験のしたしらべ下調も母が側そばから手伝うので、年と共に童子自身も母をば姉か友達のように思う事が多かった。

しかし十三の頃から童子は何の訳わけからとも知らず折々こんな事を考えるようになった。母はもし自分というものがなかったなら今こんにち日までこうして父のなくなつた家にさびしく一人で暮してはおられなかつたかも知れない。自分が八ツの時亡くなつた祖母の家にとくに帰つてしまわれたかも知れない。母がこの年月ここにこうしておられるのは全く自分の生れたためではないか。童子は母が養育の恩を今いまさら更さらのように有難かたじけく忝かたじけなく思うと共に、また母に対して何とも知れず氣の毒のような濟まないような氣もして自然と涙ぐんだ。それ以来童子は唯ただに母と自分の身の上のみならず

見廻す家の内の家具調度または庭の植木のさまにまで底知れぬ寂しさを感ずるようになった。

家の内には竜子が生れた時から見馴れたみな箆笥たんす火鉢ひばち屏風びょうぶ書棚の如き家具の外ほかに茶の湯裁縫生花の道具、または大きな硝子戸棚ガラスの中に並べられた人形羽子板玩具はごいたがんぐのたぐい、一ツ一ツに注意すればむしろ物が多過ぎるほど賑にぎやかに置かれてある。それにもかかわらず家の内はいつもしんとして薄寒いような気のするほど静しずかである。

日当りのいい縁側には縮緬ちりめんの夜具羽二重はぶたえ座布団ざぶたんや母子二人おやこの着物が干される。軒先には翼と尾との紫に首と腹との真赤まっかな鸚い哥んこが青い籠かごの内から頓とんきよう狂きやうな声を出して啼なく。さして広からぬ庭には四季断たえず何かしら花がさいているが、それらの物のハデ

なまめか
な艶しい色彩はかえつて男氣けのない家の内の静寂をばどうかする
と一層さびしく際立きわたせるように思われる事があつた。

日頃ひごろ母子の家に出入でいりする男といつては、日々勝手口へ御用を聞
きに來る商人の外ほかには、植木屋と呉服屋ごふくやと家作かさくの差配人さはいにんと、そ
れから桑島くわじま先生という内科の医者くらいのものであろう。いず
れも童子の生れない前から出入していた人たちで、もう髪かみの白く
なつていないものは一人もない。

橘屋たちばなや

橘屋たちばなやという呉服屋の番頭は長年母の実家の御出入であつた
關係から母の嫁よめいり入した先の家まで商いを弘めたのである。差配
人の高木たかぎというのは亡なくなつた主人が經營していた会社の使用人で長
年金庫の番人をしていた堅い老人である。植木屋は雜司ぞうしケ谷やから

来る五兵衛ごへえという腰のまがった爺じいであつたが、竜子が丁度高等女
 学校へ進もうという前の年松の霜よけをしに来た時、徴兵から戻
 つて来た亀蔵かめぞうという伴せがれを連れて来て、自分は年を取つて仕事に
 出られなくなつたからこの後は親爺ご同様に伴をお使い下さるよう
 にと頼んで行つた。長年かかりつけの桑島先生が老病で世を去つ
 たのもやはりその頃であつた。

竜子あるひは或日学校から歸つて来た時、前夜からすこし風邪かぜをひい
 ていた母の枕まくらもと元もとに年の頃は三十四、五とも見える口髭くちひげのう
 つくしい見知らぬ医者いしやの坐つてゐるのを見た。竜子は桑島先生の
 死後その代りに頼むべき医者いしやのことはまだ一度も母から聞いてい
 なかつたので、その日突然見知らぬ若い医者いしやの姿を目にした時、

竜子は何のわけもなく、この医者も丁度植木屋の五兵衛が倅の亀蔵を頼んで行ったように、桑島先生の生きていた時からその代りとして推薦されたものであらうと思つた。そしてその時には岸きしや山ま先生というその名前さえ母には問わなかつた。

新来の若い医者は三日ほどたつてまた診察に來た。竜子は母の枕元で話をしながらシユウクリムを一口頬張ほおばつた所なので、次の間まへ逃にげ出して口のはたと指先とをふいた後のち静せきに元の座に立戻つた。医者は母に向つて食慾の有無とまた咳嗽せきが出るか否かを簡単にきいたばかりで、脈みやくはく搏はくも見ず体温も計らず、また患者の胸に聴診器を当てても見なかつた。そして携かばんえて來た靴しよほうから処方せん箋せんを取出して処方したたを認めるとそのままだまつて座を立つた。竜

子は老としとつた桑島先生の診察がいつもいやになるほど念入れであつたのに引くらべて、岸山先生の診察ぶりのこれはまたあまり簡単過ぎるのに少し頼りないような気もして、女中と一緒に玄関まで送り出した後母のちの枕元に坐るが否や、

「おかア様、今度の先生はどこも見ないんですね。あれでいいんでしようか。」というと母は別に重い病気ではない唯ただ風邪を引いたばかりだからあれでいいのでしようと答えて、安心している様子に童子もそれなり何もきかなかつた。もともと童子は年とつた桑島先生を深く信用している訳わけではなかつた。唯経験を積んだ御お世辞せじのいい開業医に過ぎない事を知っていたので、新来の岸山先生の簡単な診察ぶりと愛想あいそ気つけのない態度についてはかえつて学

者にふさわしいような気もした所から、その後病氣になつた時には母のすすめるのを待たず進んで岸山先生の診察を受けた。

或あるばん晩ばん 竜子は母と一緒に有楽座へ長ながうた唄うた研精会の演奏を聞き

に行つた時廊下の人ひとごみ込こみの中で岸山先生を見掛けた。岸山先生は

始めて診察に來た時の無愛想な態度とはちがつて鄭ていねい寧ねいに挨拶あいさつ

をした。それから暫しばらくたつてやはり母と一緒に帝国劇場へ行つた

時また岸山先生に出會つた。そして誘われるままに紅茶を飲んだ。

竜子は帰りの電車の中で岸山先生が長唄を習つていふことを母から聞いた。

母子は毎おやこ年まいとし八月になると鎌倉か逗子かへ二、三週間避暑に行

く。竜子が十五になつた時の秋、東京にコレラが流行して学校は

九月末まで休みとなった所から、母子は一度東京へ帰ってまた鎌倉へ引返した事があつた。滞在中に二度ほど岸山先生が見えた。二度とも鎌倉のある病びょうか家へ往診に来たついでだという事であつた。二度目の時竜子は母と先生と三人して海水を浴びに行つた。晩ばんめし食をも一緒にすましてから先生は最終列車で東京へ帰る。それをば母子は涼みながら停車場まで送つて行つた。

次の年、竜子はもう十六である。去年と同じように鎌倉に避暑していた時竜子は毎日母と二人ぎり差向いのたいくつきに、今年も岸山先生が遊びに来て下さればよいのと言つたが、母は笑つたばかりで何ともいわなかつたので、次の日竜子は「わたし先生に手紙を上げて見ましようか。」という母はちよつと竜子の顔

を見てすぐに笑顔えがおをつくり、「病氣でもないのに、お気の毒です。
。」と言った。

東京に還かえつてからその年は冬になつても母子二人ともに風邪一つ引かなかつたので、竜子は岸山先生の姿を見ずに間まもなく十七の春を迎えた。

梅がさきかけた時分、或る日学校からの帰り道竜子は電車の中で隣に腰をかけている二人連づれの見知らぬ男の口から、茗荷谷みょうがだにという自分の住んでいる町の名と、小林という自分と同じ名前が幾度か言出されるのをふと聞きつけて何心なく耳みみを澄すました。二人とも洋服を着た三十代の男で頬しきりに岸山医学士の事を噂うわさしている中なかに確たしかに母の京子と覚しい或女の事が交まじえられている。竜子は車体の

動揺車輪の響ひびきと乗客のざわつく物音にもかかわらず二人の談話の何たるかを明あきらかに推察することが出来た。急に顔が火のようにほてつて来る。胸の動悸どうきが息苦しいほどはずんで来る。電車がとまった。竜子はついと立上つて込こみ合あう乗客を突きつけて車を下りた。「乱暴な女だな」と驚いたもののがあつた位なので竜子は停留場のいずこであるかも暫しばらくは知らなかつた。

空は晴れているが風が強いので面おもても向けられぬほど砂ほこりの立つ中を竜子は家まで歩き通しに歩いた。

その夜竜子はいつものように、生れてから十七年、同じように枕を並べて寝た母の寐顔ねがおを、次の間まからさす電燈の火影ほかげにしみじみと打眺めた。

日が暮れてもなお吹き荒れていた風はいつの間にかぱったり止んで雨だれの音がしている。江戸川端えどがわばたを通る遠い電車の響も聞えないので時計を見ずとも夜は早や一時を過ぎたと察せられる。母はいつもと同じように右の肩を下に、自分の方を向いて、少し仰あ向おもむき加減に軽く口を結んでいかにも寝相ねそうよくすやすやと眠っている。竜子は母が病気の折にも、翌朝学校へ行くのが遅れるといけないからと言われて極きまった時間に寝かされてしまう所から、十七になる今日が日まで、夜半よなかにしみじみ母の寐顔を見詰めるような折は一度もなかつた。

束そくはつ髪かみに結ゆった髪は起きている時のように少しも乱れていない。脛まぶたしずかが静しずかに閉しずかされているので濃い眉毛まゆげは更あざやに鮮あざやかに、細い鼻と優し

い頬ほの輪郭とは斜ななめにさす朧おぼろげ気な火影に一層際立きわだつてうつくしく見えた。雨は急に降りまさつて来たと見えて軒を打つ音と点滴の響とが一度に高くなつたが、母は身動きもせずやすやと眠つてゐる。しかしそれは疲れ果てて昏こんすい睡いたました傷いたましい寝姿ではない。動物のように前後も知らず眠ねむりむさぼを貪ねむりむさぼつた寝姿でもない。竜子は綺麗きれいな鳥が綺麗な翼くちばしに嘴くちばしを埋めて、静に夜の明けるのを待つてゐる形を思い浮べた。

竜子は岸山先生と母との関係についてはもう何事も考えまいと思つた。電車の中で耳にした噂うわさが根もない事であつたら無論それに越した事はない。万一事実であつたらそれは母の寂しい生涯に果敢はかない一点の色彩を加えた物語として竜子は出来るかぎり美し

い詩のように考えよう。この後不幸にしてこの噂が世間の人の口にいい伝えられるような事があつても、自分だけは母に対しては何事も知らないような顔をしていようと考えた。

そして竜子は母の方を向いて母と同じように行儀よく静に目をつぶった。けれどもすぐには眠られなかつた。夢とも現ともなく竜子は去年の秋頃から通学する電車の中で毎朝見かける或学生の姿を思い浮べた。袂の中へいつの間にか入れられてあつた艶書の文句を思出した。艶書は誰にも知られぬ間に縦横きれぎれに細かく引裂かれて江戸川の流に投げ棄てられたのである。竜子は意外な夢にわれから驚き覚めると、目の前にはすやすや眠っている母の顔がほのかに白く浮んでいる。しかし竜子は最早や最初の

ように驚異の情を以て母の寐顔を見はしなかつた。何という訳もなく一層親しい打解けた心持で母の顔を見詰めている中次第うちにつかれて今度はぐっすり寝入ってしまった。

大正十二年二月稿

青空文庫情報

底本：「雨瀟瀟・雪解 他七篇」岩波文庫、岩波書店

1987（昭和62）年10月16日第1刷発行

1991（平成3）年8月5日第6刷発行

底本の親本：「荷風全集 第七卷」岩波書店

1963（昭和38）年4月12日

初出：「女性」

1923（大正12）年6月

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。

※表題は底本では、「寐顔《ねがお》」となっています。

入力：入江幹夫

校正：酒井裕二

2017年3月1日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.waozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

寐顔

永井荷風

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>